

志摩の正月行事(資料2)

高橋 六一

目次

一、片田のネギアブリ……………	107頁
二、船越のアタラシキ・トトツリアイ……………	112頁
三、国府の獅子頭神事……………	115頁
四、立神のヒッポロ神事……………	118頁

はじめに

これは本紀要の第二十二集に載せたものの続篇である。「資料2」として由縁である。昭和六十年十二月三十一日から昭和六十一年一月四日まで、みたび志摩の正月行事を見て廻った。友人十一名が前後して同行した。行程の概略は次のとおりである。

十二月三十一日 晴	片田・船越・波切
一月 一日 曇	安乗・立神
同 二日 快晴・風強し	安乗・国府
同 三日 晴	立神

同 四日 雨 外宮に初詣で

このうち、波切の名告り注連切り火祭り、安乗のミタナ神事・翁祭りは、再度見聞して多少補正しなければならない点もあるが、本稿では割愛することにした。その他は今回の採訪をもとに資料として作成したものである。ただし立神のヒッポロ神事については、昭和五十九年一月三日に宇気比神社宮司平古周氏がお話くださった事項を付け加えてある。そのお話は「禱屋心得」(昭和五十二年作成の「立神区宇気比神社 神祭行事禱屋の心得」)の順に従って質問した、その御説明が中心である。本稿を纏めるにあたって、準備段階の記述等は多くこの冊子によっているのであり、これの披見をお許しくださった上に長時間の御教示を賜わった平古氏に、深く御礼申し上げる次第である。

一、片田のネギアブリ

* 志摩町片田

* 十二月三十一日 15…10…16…40、18…45…19…43

○ リュウグウサンマツリ

バス道路は防波堤の上にある。停留所で降りたところ、一人の婦人が浜で祈っているが見える。

婦人の話——一年の、その、無事（海の仕事を）勤めさしてもろうたもんでな、（漁師の家の者が、大晦日に、海の神様に）お礼をゆうんです。で一日の朝も。こんど改めて、一年の。（祈るのは女の人か）はい。（供え物は小豆の）御飯。でこの、贈。大根贈と、お神酒と。（供え物の名は）別に、なんとも、言わへんけど。（供えかたは）石の上に載せるんです。石をこして並べてな、三つつ。（その意味は）さあ、昔からのもんで……（供え物は折敷に入れて運ぶ）。（この浜の名は）片田大野浜。（祈る場所はどこと決まっていらないのか）はい。（↓写真↓）

大野稻荷神社での男の人の話——それは、やる人もあるがやらん人もあるねえ。

オコモリのお婆さんの話——ええ、皆行きますよ。昔はみんな、小豆御飯炊いて、夕方、祝うでしょう。御飯食べる前に、浜に行つて、井戸とか。玄関先、祀つといて、そいで井戸へ行つて、祀つて、で浜へ行つて浜祀つて、浜下まで行って、石三つつ拾つて、その石の上に載せて、お神酒据えて、で帰つて来る。毎日三日間、昔はしよったけどね、今はほとんど少ないでしょう。三日間、浜は行きよったね、わた



しら子どもん時は。今晚行くでしょう。あしたは朝から。三日まで。
(その習俗の名は)なんとゆうんかいなあ。みんなが一年間、無事に
過ごすように、ゆうて神を祀りおったんやろうなあ。

別のお婆さんの話——無事息災で過ごせるように祀りをするんだろ
うなあ。正月に浜祀りに行ったり、井戸祀ったりするのは、一年中
の、まめ・息災に、ありがたいとゆう気持やのオ。リュウグウサシマ
ツリとゆうわけやろなあ。

○ ネギアブリ

大野浜の、組みあげられたネギの所には、古い年の門松・注連縄・
飾り物類がいっしょに供えられている。(↓写真2)

境内で準備をしている男の人の話——(ここは)大野稲荷神社。

(字が大野)ええ、字大野です。大野の氏神さん、てゆうのはないで
すなあ。やはり稲荷さんですなあ。ここの稲荷さんはあのおう、十一月
の七日とな、それから一月の七日と、お祭りですわ。相当な人が、来
ますもんでな、参拝客が。千人、近い参拝客が。(浜に組みあげた木
は)ぜんぶネギの木です。(木の種類が)はいネギの木。(どこから集
めるのか)えー、みな、ふつうの、うちから、もらってくるんです。
山に生えてるのを、まあみなさんの、ことやで、みな、くれますから
ね。青年団も、今日はだいたい八名ぐらい、来てくれて、朝から、ネ
ギの木を伐りに行って、そいであんだだけのヤマをこさえたんです。昔
はそのう、車がなかったから、みな道を引っ張って。わたしらの若い
時分には、みな、ネギの木をしばってね、道を引っ張って来よったん

です。今アもう車があるから、積んで、ほいで載せて来るわけ。(そ
の時に木遣り唄は)わたしらの若い時分には、木遣り……。ここでも
え、あのおう、木遣りってゆうのはねえ、あのおう、この、注連縄を、あ
の、ネギを、焚いてね、ほいで、その、あしこで、焚いた火を持って
これへみな走るんです。ほいで、ここで、なにをしてね、ほいでそれ
から注連縄をぬってね、そこで木遣りを、やりおったんですわ。ほい
でここへ注連縄をあげおったんです。もう、代が違ってもんでね、昔の
人がもう死んでしまったから、そのことをようせんもんで……。 (オ
オネギとかツルネギという言いかたは)そんなことは、今しないです
ね。昔はあったんだらうけどね。(初めの合図は)こうゆう、竿があ
るんですよ。おすとこれにねえ、提燈をこうぶらぶらと、こうね
え。ほいでこれに、火がとぼってるわけです。今はまあ電気で、昔
は、石油か蠟燭立てよったんです。ほいでこれがずうっと二人で持つ
て、ここの鳥居を出て、むこうのあの、ネギの木の、焚いてるところへ
見えるてゆうと、もう、火をつけるんですわ。それまでは、もう、火
をつける、とすぐそれを消やす、ねえ、あのおう、火をつけるともう、
つけに行くもん、あのおう、藁をこう持ってねえ、火つけてつけに行
くんですわ。ほとそれをこんど、消やすもんがおるんですわ。ネギの
木の枝を持ってねえ、パアーツともう、ものすごいんですよ。それを
見るとゆうとねえ。それを消やして、ほで、それが、この、高張り
が、七時にここを出るんですわ。この高張りが見えるてゆうともう、
消やさずに火を、つけるんです。それまでまあ行事として、遊ぶわけ

ですね。六時半ごろから、そういう遊びで、藁に火をつけて、こう廻わしてね、そうと行くわ、それをこんだあの、ネギの葉っぱでパアッとおやすんですわ。それは、若いもんが、青年団が。昔はねえ、そういうに、むこうでまあ、ネギ、青年団はまあ、ネギをつけて、まあ、終わるとね、こんだ、そこにずっと火イ焚いてるもんでね、で、そのみな、あの、一本の、この、火のついた木を持って、ここへまで来るんですわ。おいでここまで来てこんだ、むこうへまで、またその、ネギを、木を焚きよった上へまで、青年団が走りよったんですわ。三百メートル、二百メートル、ぐらいあるでしょうねえ。こっからやっとなえ。それを、昔、鯉船なんか、あのやっとなえ、今はもう鯉船やっとなえは軒しかないもんで、そういうこと……、一等、一番にむこうに着いたもんがねえ、あのう、えーっと、どここのおめーって、ゆうんですよ。すっとそのうちからまた、酒なんかついで来るんです。昔は、そういうなえ、はでにやりよったけど、この頃まそういうな鯉船なんかなくなったもんで、そういうことやりませんけどねえ。青年団がまたここへ来ておいてみな、ここで火を焚いてこれ作るでしょう。それを持ってこのむこうへ走りおったんです、二百メートルぐらいね。(ネギを立てる所は)え決まっておるんです。大野浜って。ネギの木ばかりだと燃えないから、燃えるように藁なんか、して。(行事の名は)こころへんでは、ネギアブリとゆっていいです。ネギタキとはゆわんですねえ。(なぜやるのか)それはまあわたしらわかりませんが、昔からのこれもしきたりで、昔からの行

事ですから、昔はねえ、ここに、大きなあの網をして、鰯獲る、魚を獲る大きな網があったんですわ。すところ、そのう、火を焚くとゆう、魚が、近くへ寄って来るとゆうな意味で、焚いたんですがねえ。今アそんなことないですけどね、だけどまあ、昔のそういうな、なんでやっとなえ、昔はその、火を焚くと魚が寄って来るとゆうやうなわけですわ。昔はその、火を焚くと魚が寄って来るとゆうやうなわけですわ。(ここの人は昔は漁師だったのか)ええ、だいたいがね。んー、昔は、ま、鯉とか、海老とか、栄螺・鮑、ねえ、今でもやっぱし、海老・鮑、それから、鰯とか、鰯とかね。アカミゆうのはねえ、鰯、あの、鯉の食う小さい鰯があるでしょう。あれは、この、鰯がねえ、こいッ、群んなってこのー、浮きあがってこうくると、まっかになった、なるんですわ、海がねえ。それをアカミとゆうんです。もう、海の上をこう、チャチャチャチャーッと、すっとそのう鯉に追われるんでしょう、鰯が。すすすともう、鰯がもう、そのう、下へ潜れずに上向いてピャーッと行くんです。すすすともう、そのう、下へ潜れずに上向いてピャーッと行くんです。今はもう、このうな機械船ばかりでしょう。昔は機械船なかったから、うんと、この近くまで鰯も来よってねえ、地曳き網で鰯も獲れよったんです。そういうなんでこの、ネギアブリもしよったんですけどねえ。もうその、今はこのう、拡大して、あのう、機械船が多くなったから、もうそういうなになが、沖へ行ってしもうですわ。もう近くへそういうなには、来なくなりました。けどまあそういうなしきたりだけで、ただ遊びだけでやっとなえ。(乙部・女鹿・大里

も)それはあっちですわね。むこうも焚きますでね。せやけど、ここ
がいちばん大きいんですわ。(↓写真3)

ネギアブリの火がついたのは六時五十五分。勢いよく燃えて、七時
二分ほどにはほとんどもう消えかかる。そうすると青年団の人が一団
になって稲荷神社に向かう。手にはネギの木の火がついているのを持
ち、それを稲荷神社の焚き火の所にくべ、そして社務所に挨拶する。
そうすると社務所から清酒が二本、礼に出される。それを持って青年
団一同はお稲荷さんに参拜。

男の人の話——ここ(社務所)はねえ、婆さん連中のオコモリで
す。大晦日の晩だけ。それからお稲荷さんの大祭の、七日の晩とね。

一月の七日、十一月の七日ですわ。(↓写真4)

お婆さんたちの話——オオツゴモリですもんでな、オコモリ。(女
の人だけ)はい。男の人ら、そこらにおるわ(笑い)。無事で働くよ
うに。 (歌は)なんでもええの。おもしろい歌でも、はよりの歌
でも、なんでもええの。(籠る人の年齢は)決まってもせんけどなあ。
太鼓をトン、トン……とたたきながら、伊勢音頭・草津節などの調
子で歌う。中にはだいぶくだけた内容の文句もあるらしく、さかんに
笑いが起こる。次のように歌われる。

ハハーヨーオーイーナアー　メータメータノーヨ(一
同、ハヨイヨイ)　イヤワカマーアーツーウーサーマ
ーアーハー(ハヨイセイエコーラセ)　ヤレメータノー
オエダハーサアカエーテーヨイコーリヤー　ハアモシー

ゲールー(マタヤットコーセーエエー　ヨイオーヤ
ーアナー(コリヤコリヤ)　ハリワイナーアコーレワイセーエ
ー　ヤーアローイイトセー)(コリヤオツギノバンダヨ)
ハ……モーオーリヤーイトー(ハヨイセイ　コーラセ
ー)　ヤレ　イーセーワーナーア　コリヤ　コイーヨ
ーコイショヤア　ホトケカーラーツーキー(モーマタ
ヤットコーセーエエー　ヨイオーヤーナー(コリヤ
コリヤ)　(ハリワイナーア　コリワイセーエーサーヨイオー
ヨイイトセーエエ)

ハヨルノヨナカーニー　アワビーガーウゴク(ア、ドッコイ
ショー)　ウゴクハズダーヨ　コリヤー　タコガーデタヨ
ー　チヨイナチヨイナー

ハサーヨイナアア　コレノショーモロチーノー(ヨ
イヨイ)　ハアアオクローイーズーノートーヨセーエ
(アーリヤセーエ　コリヤーセ)　コリワリナーアコー
ノーヤーアア　ダーアイージョートーヨイソーオリヤ
マタナーエーダアア　(ソーマータヤアアトコーセー
ーエエ　ヨイイイヤアア)　(コリヤ)　アリワイナア
ー　コレワイセエエ　サアアヨオオイトセーエ)

ハサアヨイナアア　カータダオイナリサアア　ン
ワー(ハヨイヨイ)　ハアア　ノ　ヨイオオオイシ
ヨイオアアア　(ヨイセイ　コーラセ)　ハシリコオー

ンヤトワアアオサカトナトアヨオトイコトリヤト。スウカ
アアケエエトター。(マアタヤットトコトセトエエエ。ヨ
オイヤアナー。アリワイナアア。コレワイセエエダア
トヨロイトトセト)

二、船越のアタラシキ・トツリアイ

* 大王町船越

* 十二月三十一日〜一月一日 23:04〜0:29、3:37〜6:25

○ アタラシキ

船越神社で世話役たちの話——(この木は)オニサイギとゆうんや。各戸、二本ずつ(出す)。その年に死人のあるうちは、もう出さん。これはあの、門松へ一本ずつやって、あの、神さんへ二つやって、で仏さんへ一本やって、床の間へ一本やる。(木の種類は)松。(線が書いてあるのは)これは閏年は十三、ふつうの年は十二(本書く)。これはな、イワイを炊くでしょう。うちで、その焼で、こう(書く)。イワイはあの、煮染めとかそうゆうもん炊くはな、魚入れて、昆布入れてな。(正月料理がイワイか)ああ。それとマメウチするうちは、豆を、炒ったあとの焼でこう……。さっきシメノウチやったやけどなあ。神社へやる大注連縄うったや、さっき(社務所で)。ほであれをな、むこうの木へ、こう注連縄かけるわけ。

(今来た若い人たちは)あれはな、今晚一晚は無礼講でな、もうど

こへ入っても、お構いなし。昔からの伝統なんだ。あれはあの、火祭りな、昔は柴を、引張って、で前浜へ運びおったんや。今はもう前浜べみなこう集結してあってさ、それをくべるだけや。これはあの、だいたい三時、四時頃からやな、燃すのはな、朝のな。でこの火種を、こうあの、ジロヤタロヤゆうて、あの明かし、火をつけてな、こう廻わし持って、十人ぐらいで浜へ、ここの火を、持ってぐわけや。ジロヤタロヤアキナイショカ、ってこう行くわけや。商いしょうか、と。(若い人の役名は)あれはなあ、まああの、火祭りあげる役目やけどな。名前は、まあ、ここはワカイシュとゆうとんやけどなあ。でハナジュバンを着るわけや。それはな、その、自分とこの、な、母さんのを借ってきたり、いろいろして、それでねじり鉢巻を、色のあれで、で、褌も掛けるわけや(男の子が年頃になると母親が用意して置くともう)。何歳の人か)だいたい学校卒業して二、三年とゆうのが多いな。まあ、高校へ行っとるん。中学校はぜんぜん、しないけどな。あれもう、友達がおってさ、ヤドを決めておってな、十人ぐらいずつ。もう、彼女のとこへ、こうのたれ込んだり、いろいろ、あるわけやでな。

でこれ、十一時半なると村中、あと集まってくる。でここで初めて、除夜の鐘を鳴らして、アタラシキを、行なうわけやな。これはあの、文句があつてな、アターラーシキ、トシノーハジメ、とこうゆうんや。オオセンドウと、それ次のセンドウがあつて、交互に、とこうゆうようになつとるんやけど。

あたらしき

としのはじめ

とうにさいわい

じゅうごけいろく

もちのたから

こがねのたから

大いその

おおもたから

小いその

こめたから

いろいろに

いととはと

ぜにこめ

もちもちまいたやらんたのし

ここのかかは一番かづき

三度のさかなはきよきよ

オオセンドウが（上段の一句を）やって、コセンドウがこれ（下段の

一句）をやるのや。この（文句の）わけもあるんやけど。わしらな

あその、昔のことはちょっと……。ま十年ばかりやってるけども、昔

の人が言い伝えとらへんもんでなあ、すっかりと。それで、まあ概

略、ざっくばらんに昔のことを思うともうなつ、けるわけやな、簡単

にいろいろとな。あの、提燈を持って、あそこへ並んで、でマイクを

通して、やるわけやな。あそこで稽古しとるもんが。わたしら、保

存会の仲間がやとるわけやね。あのう、ヤドがあつてね、昔は。で

その、ヤドへ、毎年頼まれて行く、わけ。だいたい、そうやね、三

組くみ四組よっくみぐらい、昔の……。こう廻わって行くとね、あの、ええ着物

を着てさ、入口に坐わって、で祝儀を出して、でその、むこうがアタ

ラシキをゆうてるうち、こう受け取るわけです、各戸でね。祝儀は包

みもんでこう出すわけや、袋さ。それをまあまとめて現在、あそこで

受け取ってるわけや。ま、ていねいなうちへ行くと、お盆に、ちゃん

とやって、次あの、お神酒も、な、廻わってもらう人に飲まして、や

っとるわけ。昔は三組ぐらい、五人ぐらいで。おとなばっか。提燈つ

けてな。服装は紋付きで来て、羽織袴で。ま今はもう礼服で黒でやる

けどな。キダキハチさんてゆうてモトヤが昔あったんだ。これヤこの

う、アタラシキのモトヤで。一組五人でな、南は戸数が少ないもんで

三組してなあ、ほいで北は四組したわけやな。せやけに三十五名いる

わけやなあ。ほいでもう、こうゆう時代で、その、人口も減っただも

んでなあ、人が雇いにくいわけやなあ。ぜんぶそのう、あらゆる、業

種（の人）やなあ。四十五年ぐらいまでは、一軒一軒廻わってたやな

あ。そんなもの一軒一軒廻わるとまあ四時頃やんがなあ、いちばん最

終的に。へたすると五時頃や。それを、あのう、南と北の、これアな

山神やまがみさんゆうてな、そこにあるけどな、山神さんを祀とる家がな、

そのヤドになってな。南と北にあってな、そいでこんだ一軒一軒廻わ

る時はな、その山神さんの前へ行つてなあ、竈かまどの火イ入れ、その祝

詞あげるんや、正月前に不幸あつたうちは、行事には携わらへん。ほ

いで、夜通し廻って、声涸らすんだ。一軒一軒廻わるもんでなあ。こ

れ、声涸らして、あしたの、このくらいのお餅一重ね、御苦労さん

ちゆて、くれるだけでな。そやけんその、昔やねえ、勤労奉仕で出た

なんのもんやねえまだ、地区のために思うてな、廻わとるけどね、

もう、若い世代はだんだんな、すたつてしもうて人集めにくいもんで

な、そいで、モトヤがもうなくなつてな、そいでこれはなしにするの

しのびないってゆうんで漁協が主になってな、そいで漁協が、あの

う、まあ、昔からやっとなる我々を頼んで、それで、もうこんどは、簡粗化やなあ、ここで、しきたりだけはやって。それをあのおう、略してさ、現在もう村中がここへ集まって、ここでいっぺんにもう新年の挨拶もみなここで交わすわけや。自治会の会長の挨拶、新年挨拶するわけや。それからこの神社へ参拝を、して。

世話役の人々が正装して拝殿前の階段脇に参入、注連掛けをする。

その時「ホーエン、ヨーエン……」とくり返し声をかけ、最後に「ヨイ……」と言う。(↓写真5)

(この木は)椎の木。これは炭を包んだもの。これ、あの、たいまつつのでわりやね。それで、これは刀の形しとるでしょう。これでほんど、これ切るんや。太刀の代わり、しとるけんな。それでな、こいでな、あの終わってからな、百姓たちがな、この苗代とる時にな、あの、(苗を)小束にくくるのにこれ(注連縄の藁)を、使うんや。(この葉は)ゆずり葉やけどな。これが裏白で、それからあの、エセブもあるやろ。そいであの、とげのあるのあるけどな、ここらにゃないもんでな。そいでだいたい、エセブと裏白と、それから、こうゆうなもの、椀の代わりにな。これ、ヒトカタ。これ下が袴でな、上が袴でな、ほいであの、頭でな(こよりで作ってある)。(これは)ツボキ。そいでこっちへ膾、入れてな。そいでこっちへ御飯入れて、赤飯をなア、めでたい時やもんでなア。そいで、浜へはなあ、朝、行くんやがなア、リュウグウサンマイリやな、リュウグウサンへこのう、ま今年も、大漁しますようにてな、誰も踏んどらん石をな、拾って来てな、

そしてこう、その膾と、赤飯を供えて、でお詣りするわけ。

注連掛けを終えた人々は拝殿に居並び、宮司が村人の一年中のまめ・息災を祈願する。終わってオオセンドウ以下が庭に立ち並び、アタラシキを唱える。三度くり返す。終わって、一段低くなった庭に待機していた村人は拍手。自治会長の挨拶があつて、随時、「おめでとウ」の挨拶。ワカイシュの騒ぎながらの参拝、村人の参拝が順次続く。(↓写真6・7)

○ トツツリアイ

境内での話——まあ朝の、だいたい、二時半、三時頃までこれ(オニサイギ)を焚いとってさ、な、でそれを、火つけてジロヤタロヤゆうて、前浜へ移るわけや。前浜もブルトーザーでならしてりっぱにこう、してあるわ。ハサバ(杉丸太)もみな置いてな、ハサバでこう、三、四人でこウパアツと突くん、こうあげるのさ、夜明け時分に。でこれは昔は、北と南に分かれて、やりおったんだ。現在はもう、一ヶ所で。この年もう、大漁するようにな。これ、漁師の仕事やでな。トツツリアイてな。

前浜到着三時三十七分、さかんに火を焚いている。新しい太陽を呼ぶ火という感がする。

火を焚く人の話——茅はねえ、一軒あたり、だいたい二束、二把ずつねえ、供出でなア。あとア、このう、十二月のオ、末の日曜日か、無料勤労奉仕で、あのこの、タカヅとゆうとこへね、トメヤマのどこへ、刈りに行くん。青年会・婦人会、それから、自治会、それから組

長会、老人クラブ、こういう人。また、給料払うてなア、五人か六人女子の人頼んでなあ。だいたい五百把ぐらい、その日に刈るんから。

そっであとはア、一軒に対して二束ずつ。それは自分の、手ぎわにある、こうゆう茅藁をな、もう十二月の初め頃までに刈ってな、日柄のええ日にな、先勝とか大安とかゆうようなな。仏滅や三隣亡にヤ刈らんでな。ほいで刈って、大つごもりの午後一時から、三時まで、ここへ皆持って来るわけやな。あとそのう、五百からあまり切ったやつは、この二十九んちの日曜日のに、青年会の人が、トラック借って運んで。ほれまた山もこの、八月九月頃にクサアゲ、下草あらげたやつ、ここへ持って来とるんだがな。せやだいたい、千把あまり、出ているわけや。ほでこれー、こないしてらうちに、もうだんだん時間迫って来るとな、あのうハナジュバン着たワカイシュが、出て来て、あこに、伏せてあるやろ、あれ（ハサバ）でこれ突くんて四方八方から突っ込んでなア、あげるんや。そうゆうまあ準備しとるわけやなア。でそのトトツリアイには、魚を釣るゆう意味でな。ちょうどこの火イにたとえて、トトツリアイとゆうたけどな。火祭り、とゆうとるんやがな、昔はトトツリアイとゆうて。この頃はワカイシュが来ても、だいぶ見境いなしにド突くわけ、これで。（この元火はさっき神社から運んだ）ああ、あの火イや。火を運んで。

相当な火の山になっている。それが熱く固まっていはいけないで、適当に崩している。それがまた一苦労のようだ。作業の手順のことでいさかきもあつたり、ワカイシュもまたふざけ、暴れている。火

を焚きながら伊勢音頭を歌い、新年の挨拶を交わす人もある。歌の最後に、手拍子で一同が、

「アーラヨー……ヨー ヤーットーコーサー エエー ヨーイー
ヤーナー アーリヤリヤア コーレワイセイエー ダーアーヨ
ーオーオー ヨーイートセー……」

と歌った直後、男たちの「ソレイケーツ」という掛け声とともに、ワカイシュは火の所へ走って行き、ハサバを突っ込み、火の粉をあげる。だいぶ重労働らしい。一斉に突っ込んだあと、一人の肩を梃子に重量をかけ、うまくいくとみごとに火柱が立つ。人々は「オーオッとかオーツ」という喚声をあげ、ざわめく。それがえんえんとくり返される。やがて東の空が明るくなる。しかし、あいにく曇り空で初日の出は拝めない。（↓写真8）

○ 船越のこと

昔はこのう、前浜と内海とが、な、浜になっとなって、船を越したわけ。大津波があつて、このの港が何百間、三百間そこら、沈没したんです。千人塚[?]てて、相当死んどるんです。

三、国府の獅子頭神事

* 阿児町国府

* 一月二日 15…29…18…16

15…33 触れ太鼓が鳥居を出て村中を廻わって行く。案内板に「正月二日 例大祭獅子頭神事祭 午後四時」と書いてある。

15..58 神職等一同、境内に参入。

16..04 本殿前庭の所定の座に着座。修祓・開扉・降神・献饌（オシタモチと、腹合わせのイナダなど）・祝詞奏上（アメノシノミ・アメノホヒ・アマツヒトメ・クニツヒトメ・クマノクスビ・タギツヒメ・タゴリヒメ・イチキシマヒメ・オオヤマツミ・コノハナノサクヤヒメ・イザナキ・イザナミ・アメノミナカヌシの、十三柱の大神のみたまのふゆによってよき年になるようにという内容）・献幣・献幣使祝詞・詩吟・玉串奉奠・撤饌・閉扉→17..08。

拝殿前庭にて獅子頭神事。獅子頭（二人遣い）に宮司がオシタモチを三回くわえさせる。そのあと獅子頭は庭を一巡、この時、人々は賽銭を獅子頭に投げ込む。太鼓が打たれ続ける。六回目の巡りを過ぎると、廻わりながら獅子は暴れ出し、人々も追い騒ぐ。七回目の半分のところで境内を出て村へ行く。（↓写真9・10）

17..54 獅子が戻って来る。うしろ遣いは赤い天狗の面を着けている。今度は提燈を先頭に、神職・獅子がイワモトの浜へ行く。太鼓を打ちながら、通りに面した家は高張り提燈を掲げ、門口に立ち並んで拝する。浜（ゴルフ場の中）で三回、イワイをする。帰途、浜口家の前で一礼する。

18..06 一行、神社に帰着。拝殿前で一礼ののち片付けに入る。獅子頭は櫃に納められる。オシタモチは村の各戸に配られる。

宮司の話——（シタモチをくわえさせるのは）あれをイワイモチとゆうんですが、オシタモチゆうけども、ねえ、イワイの、まあ、獅子

頭に、お獅子さんに、食べていただくという……。その時に宮司の唱え言は）イワイとゆうんです。そうすつと、太鼓で、イワイ、ドンドン……ところが、イワイと三回あれ、（言う）。（獅子が廻わる時に村人が唱えるのは）ゴキゲンヨウ、オヨバツサレとゆうんです、あれをねえ。ゴキゲンヨウ、マワラツサレ。獅子へ付いて暴れるのがいるねえ、ツカツサレとかねえ、オヨバツサレ、ツカツサレ、ゴキゲンヨウマワラツサレ、いろんなことばあるわけです。（おひねりは）ええ、あれはあの、賽銭をね、お獅子さんへ、投げ銭を入れると。（境内を）七回廻わって、終ってね、それから、浜へ出て、するんですけれども、あのう、だいたいねえ、三回・五回・七回でゆうのが、もう、よくあらわしてるんですわ。それでなかなか、今日はまあ、早く済んだほうですねえ。ですから、七回目にはどうしてももう、ずうっと、村の、ずうっと下のほうまで、行って来んならん、いかんもんでね。途中でね、あの、待ち受けしとってどこへ引張られて行くかそれわからん。もうどっかよそ村まで行ってしまいかもわからん。ほすつと何時間でもこんで待つたらんならんわけ。しかしまあまあ、一時間、以内で来ると思いますが。そういで引張って長いこと荒びたほうが、その年豊年やとゆうことで。

老人の話——あのイワモトでなア、浜あってなア、それ、礼に行くの。いちばんこの、岩があるがなア。その、前の、のは獅子岩とゆうてなア、その間にはざかっておってなア、そしてこのなア、二番目のうちがなア、あの、婆さんが拾うて来てなア、そいでもったいない

てエて、ここへ、納めたんだ。したんでこれ終わるとなア、七回廻わって終わると、礼に行くの。(拾った家は)浜口でゆうて。遊びに行たんかいなあ、浜へ行たんかいなあ、どっちかわかんけどなあ。ともかく、前の、前の、前のお婆さんじゃてなア。そうゆういわれじゃもんでな、ここはなア。おしてちよどここのまは、七つ八つ、こまかいの入れて七つあったんじゃ。それが、ここがいちばんええてでここへみんな集めて、合祀したんじゃ。それで七つ祀らないかんの。七回、七つの、ナカンドサンが合社してあんなもんでなア、そうゆういわれでなア、獅子さん七回廻わるようになったの。(オシタモチは)あれはなア、まあイワイモチ、ま餅ってゆうものは、どこへでも祝いに使うんだもんでなア。けど、シタモチってなア、オシタモチ、シタにしてあってなア、ほして祝いで、あの、祝うように、あの、こっちからなア、お獅子さんどうぞどうぞ、みんなのあのなア、あの、なに、幸福願いやとゆうて、オシタモチを、一回ごっこになア、廻わってくんごにね、お獅子さんに、まああいてなア、お獅子さんに、お餅を、入れんのやろうなあ。おっで、元気よう廻アって来いてんじやろうなあ。あの一般になア、ここの祭典の、餅はオシタモチは大きなの、あれを切ってなア、で村中へなア、あの、小豆んのとなア、配るんや。(餅を用意するのは)神社。神社のなア、なやかや、役員がいるから、分けて。

浜口家の人の話——あのな、御先祖さんがあれ、拾うてな、昔の、獅子頭をな。そして、ここで、せんと、あのう、みんなでそのう、祝

ってもらうとゆうことで、神社へ、納めてそして、だから、オヤモト、獅子のオヤモトってゆうな形で、昔からあのう、こう、潮汲みとかいろんな、こう行事をさしてもらってるんですねえ。もう、獅子はそのう、神社のほうで、扱って。四代、五代前ですか。お婆さんが。それで、ちゃんと国府の舞布は、短い、ここまで切ったがんやと。獅子頭が海でな、あのう、濡れるもんでそのう、獅子のあのう、布てゆうの、ずうとうしろまでこうくっ付いてるでしょ。それがあの、潮で濡れるもんで。頭だけでも重たいのに、その布が濡れていもんで、まだメカゴ重いもんで、お婆さんの力ではよう、その、担いで来られなかって、そして、岩いな、載せてな、それでオヨバッシヤレ／＼とゆいなはった。オヨバッシヤレって昔の方言でな、おばれやしヤレ(おんぶしなさい)とゆうことを、オヨバッシヤレて、ほんだ、そして軽かったんやって。メカゴとゆうのは、こんな長いのでな、これぐらいの、磯草を入れる……。磯に行きよったお婆さんが……。

獅子遣いの話——(面をしていたのは)ベツトウドン。(二人とも)ん。(出て行く時だけするの)か)いえいえ、ほんと(ずっと)面すんのやけど、面まあ、あの、破れてるもんで。(本来は二人とも)面かぶる。あれ今、はずさねと危ない。前はこの額の上にこうやって……。同じ面やな。

四、立神のヒッポ口神事

* 阿児町立神

* 一月一日 15…19…17…40

同 三日 9…45…23…15

○ 禱屋(※印は宮司、◎印は村人の話)

一月十二日 祈禱会において選ぶ。配座帳による。計十三名。忌中の家を除く。

十一月十日 夕刻、宿元に集合、諸般の協議をする。

十一月十一日 神役係二人は楽員三人を頼みに行く。

十二月十一日 早朝より白米一升または糯米一升を持って宿元に集合。寄米(米寄せ)。神役係は楽員に挨拶。宿の大戸前に笹竹二本を立てて注連を張る。注連各種、ツボキ・縄・縄襷(左撚り)を用意する。

十二月二十四日 早昼食の後、宿元に集合。明日の準備(特に丸注連用に若松・今年竹・切芝)と境内の清掃・整地。神役係は神職・九人役へ明日の使いに行く。

十二月二十五日 早朝、宿元に集合。滝の浜へ行って禊齋。帰着後、諸準備。社務所(昭和三十七年の改正以前は宿元)において神職・九人役(年番者)・鳥の舞役・小踊こおどりの六名を饗応、この間に丸注連巻きを行なう。また各所に注連を張り、小屋の屋敷取りをする。翌日より一月三日まで、鳥の舞役は鶏の時参りをする。

十二月二十七日頃 杜氏は朔日用の神酒一斗五升を仕込む。※神殿へあがるお神酒は甘酒でないです。一夜造りとゆうやつをな。ふつうの御飯へ糍だけをさつと振りかけて、神殿へ。それは禱屋から造って来て、供えるのは九人役の一人が。

十二月三十日頃 三日用の神酒四斗くらいを仕込む。※(糯米を入れて)甘味を出すわけです。

十二月三十一日 早朝より神社に集合、祭場の準備をする。木杭・男竹・縄・新薦・藁を持参する。※小屋を造るんです。(藁は獅子・小踊の膝つき、また座配用に)藁をやり違いにまん中を縛るといふのは、座配の時に使うんです。この広場へですなあ、自分の座へ、決められた自分の座、みなわかってますから、その座へ行って、自分の坐るのに、その敷き藁を持って来いと、請求して、当番が、自分の座のなを、持って来る、敷くのはこっち、その上へ坐る、それ用の藁なんです。(その他にこの日用意しておく「腰の物」二十本は)あれは禱屋が、あそこへ竹持って来てますわなあ、あれへ十二銅を挟んで、紙のヒネリですわなあ、お金を十二円、百二十円、千二百円でも、へくる、それを挟んで。それ、禱屋から、お獅子さんに、それを口にくわしてですなあ、宮中へと、それは九人役の収入なんです。九人役の経費に当てられるんです。それ、コシノモノと。(十二銅は)はい、月の数だけ、まあ今、百二十円。十二円でもよろしいしなあ。(「幣串」十本は)それは鳥場へ坐る寺方など、あの人、その幣をさすために、その串をこしらえて持ってぐんです。その人は幣はもう自分でた

って持って来てるわけです。竹だけを持って行って、そしてあの、お獅子さんに、くわせましたでしょう。それもやはり、十二銅、ヒネリを。

○ 一月一日

早朝、禱屋は各戸男女二人ずつ、シアゲ二個を持って宿元に集合、諸準備。※(シアゲというのは) 甘酒入れて、運んだ……。以前はみな、うちにありましたけどなあ、ああゆうの、今造る職人がないもんで、今ここへ、厄歳やくさいの人たちに献納してもらって、特別に造ってもらってありますけども。(男女二人というのは) 奥さんは洗い小屋、ね、茶碗でもなんでもみな洗う、そうゆうために。

七時頃、神役係二人は神職・九人役・役人(自治会長)・神役の家へ、「本日神事挙行致すに付参列あり度し」と使いに行き、昼食後また「只今より神事開始致すべきに付出席を乞ふ」と申し廻わる。

※(昼食は) 禱屋はもうぜんぶ宿元でやりますけどな。獅子舞の四人だけはまた別の所で、御飯食べて。獅子舞を請け負うとるうちへなあ。みんながその、個々に風呂へ行ってやっとうと、時間がまちまちになるでな、その一所へ寄って、その獅子舞役だけは禊齋をして、そしてまあ、服装を着けて来ると。

午前中、例祭。鳥の舞役列席。神酒(モロミ)二升をシアゲ二個に入れて神社へ持参。二日の大祭も同様。

神社に運んでおくもの、神酒・白餅(白米五合を膳に入れて竹篋を添えたもの)・無垢塩・一夜造り・肴(ゆで菜・大根・なまこ)・榎搗

栗・瓶子・恵比須扇・蠟燭・腰の物・幣串・新薦(獅子薦・敷薦等)・筵・鮑貝(貝殻)、その他炊事用品。※(白餅は) 前はその、オンコ餅、イイのようなのを使ってあったですけども、今はもうそういのやらずに、ただもう白米を。竹篋てゆうのは、結局そのイイを切るメシバでしたよ、その代用に竹篋を。餅でなしにイイでしたよ。(恵比須扇は) 小踊が持つ扇です。あの、小さいの。(獅子薦は) 鳥の舞役は、獅子を置く長いのを、二間のを造らななりません。あれも同じ長さでなく、オンカシラのほうがメンカシラよりもちょっと長く。(鮑貝はパッパの) 火を入れる。たばこの火です。

昼食後、瓶子係は瓶子を持ち、神酒(モロミ)一升をシアゲに入れて婦女に持たせ、氏寺少林寺に納める。その時「宮の谷より宝泉坊をかけ上り寸尺山を越え瓶子門を通りて例年の通り瓶子を差上げます」と口上を言う。住職に「出直して御座れ」と言われて一度門外に出、再び同様になると「お通りなされ」と言われ、座敷にあがって神酒を納める。年酒の饗応を受けて退出。※まあ今、道路改正になって、新しくできましたけれども、ずいぶんその山道を、そこんとこ宝泉坊とゆうんですけどなあ、そこを通過して、云々と、通った道順を、ずうつと言ってそいで、例年通り瓶子を納めますと。「出直して御座れ」とゆうのはな、またその何に来るかわからんんだから、(住職が) ふつうの服装しとるでしょう、自分のその、衣を着てる間、ちょっと待ってくれと、ゆうためです。

昼食後、一同、定めぬ装束で神社に行き、宮中・鳥場等の座席を作

る。※神祭の間だけ、あそこ(参籠所)を宮中とゆうんです。

15…30 宮司、宮中に入る。着座後、「ハゼモース」と声がかかり、禱屋は宮司に無垢塩・一夜造り・白餅を、獅子舞役・小踊に榎搗栗を運び、宮中央に敷藁を敷き、その上に敷藁を敷いたりして準備を整えていく。15…35。※(榎搗栗は)小便に出られないから(それを食べておさえる)。

15…38 第一献切菜の盃を宮司・九人役・神役に出す。盃は汁椀。※菜っぱのゆでたやつをな、切菜と、それをこうゆうふうにつづつ。酒の肴なんです。

笛の水を笛吹きに運ぶ。※笛、中、湿すのを。

15…49 鳥の舞役、準備にかかる。神職より含め紙を受け取り、拝殿に着座。宮司、無垢塩で禊めたのち本殿に上がり、坐して拝礼、祝詞を奏上、終わって宮中に帰座。

15…56…16…04 笛・大鼓に合わせて鳥の舞。この間、宮司は神樂詞を微声にて唱える。舞に対して村人の声がかかる。

16…12…16…20 笛・太鼓が鳴り、宮司と九人役の一人が獅子殿より獅子迎え(俗にタナオロシと言う)。まず獅子舞・小踊の装束が出され、獅子薦が敷かれた所に獅子頭と舞衣が置かれる。獅子舞・小踊の役は小屋場の裏で装束を著け、できあがると小屋係から無垢塩で禊められ、宮中のアマダレで宮司からまた無垢塩で禊められ、獅子舞役は獅子頭と舞衣の中に入れてしたくをする。

16…36…16…59 一番起こし。笛・太鼓が鳴り、まず宮中で舞った

のち、庭で舞う。獅子が宮中への帰途、宮中に入る前、宮中で舞っている間と三度、小踊の二人は跳びながら交差する。小踊に付き添っているのは鳥の舞役の代理、獅子を導く役目。一ノ禱・二ノ禱の息子がやる。役目の名はなし。◎太鼓がドドドンと鳴りますやう。(獅子の)子ども(小踊)たちが、いわゆる喜んでね、親がうちへ帰るから、ゆうて、喜んでこう……。そいでむこうへ行ったら、(獅子は)寝るわけですね。あそこは宮中になるわけやけど。床入りです。四番起こしにね、上で、こう二つがつるぶ、時には、いわゆるキス、床入りのことだな、そういうことです。親が床入りをするから、それをあの、喜んでさね、そういうような、ものですな。あそこ、ドンドンちゅうて、あそこで一回、それでアマダレで一回やって、そいで宮中へ入って一回やる、三回やれるわけですね、その間、ようするに、三回ないし五回とね。

第二献削物を獅子舞役に出す。※今度は大根の皮をむいたやつ、長く。それが酒の肴になるんです。

17…09…17…32 二番起こし。獅子がちょうど庭のまん中へんに来てところで、宮司・九人役に第二献削物を出す。17…25 村役人がやって来る。二番起こしが終わると楽員へ第二献削物を出す。(以下、退席)

三番起こし。終わって獅子舞役に第三献俵物を出す。ナマコ二切れ、盃は親の椀。

四番起こし。始まる前に小踊に恵比須扇の替えを渡す。舞いは宮中

だけで行なう。スライイと言う。※スライイと言うのはまあ、出て来ずにはすな、宮中で、あの「ヨイヨイ」とゆうの、獅子、半立ちになって舞ったの、あの時だけが外に出て来んもんでな、スライイと。しかしこのスライイというものには、敦盛の吹いた青葉の笛だと、楽譜がなあ、でその楽譜がわからんから、もうその「ヨイヨイ」したのだからゆう人もあります。確かじゃないんですが。

五番起こし。獅子が宮中を出た時、宮司・九人役に第三献俵物を出す。その前に鳥の舞役二人は宮中入口に跪き、「これより留盃を出します」と挨拶する。舞いが終わると楽員に第三献俵物を出す。

この日は六・七番起こしを行なわない。

寺方・役人がやって来たらただちにパッパの火を出し、鳥の舞役は九人役付添で挨拶をする。それには作法がある。その後、順次、第一献・二献・三献と出す。給仕は裱役。その後、献外の盃(清酒)を出してもよいが、これは持盃です。※まああの、膳とお神酒(シアゲ)と両方を持って行くことを持ち盃と。三献の式の済むまでは、お獅子さんの場合は、両方いっぺんに持ち盃で行きますけど、最初、膳を持って行って、次にお神酒だけを持って行くという、役ありますので。持ち盃というのは、膳とお神酒といっぺんに持って行くことを言います。

第三献が済むと、時刻を見計らって素袍役五人が長竹二本ずつを携えて、まず宮中へ、次に鳥場へ、「留盃は通りましたか」と伺う。また、山場へ神酒を出すこともできる。※山場というのは見ている見物

人。お客さんに、お神酒を。まあいちおう、その式(第三献)の済むまではやってはならないと、その式が済んだらお客さんにもみな、ふるもうてくれということなんですけど。

八番起こし。

九番起こし。留め盃が通ったら、鳥場へ幣串一本ずつを渡す。鳥場の含め物が済み、獅子がハゼ場の東端に行くと、素袍役二人が腰の物二十本を獅子に含ませる。

※オッコミというのは、獅子がもうあの宮中へ、もう神事の終わりのほうの獅子が、あの宮中へ、走り込むんですわ。オッコム前には鳥の舞役二人が、獅子招きと、あの、アマダレで、獅子よ帰れと、招く……。

神事が終わると獅子納めをし、宮中一同に別献の神酒・俵物を出す。宮中諸員退場、禱屋一同、あと片付けののち宿元に引きあげ、散会。

○ 一月二日

午前中、鳥の舞役二人は神社大祭に装束を著けて参列(モロミ持参)。
※神社祭典がありますので。神事と違う。

禱屋は、男一人は宿元に集合して明日の準備、女一人は神社で昨日の器具を洗う。男が準備するものに小判七枚(厚紙に金紙を貼る。もとは粉餅で作った)と豊年竿の掛け物がある。それは十二支一個(その年のを文字または絵で表わす)・小判二枚(豊年竿用で拾両と書く)・鯛二尾(厚紙で作る)・「年」の字一個(金紙を貼る)等で、一つは

十二禱(銅)・橙二個・稻藁(穂付きで根を上にして石州紙で巻き、三ヶ所を白苧で縛る)・「年」の字、の順にさげたもの、もう一つは十二禱・十二支・小判・鯛(口を合わせた形にする)の順にさげたものである。※これ、ダイダイホウネン(代々豊年)ですんねや。(稲穂は)もう禱屋が、この十二月になるとあたるから、各自が氣ィ付けて。以前はこれ(小判)、餅でコバンオシとゆうの、やったわけです。まあ今はこうゆうもんで。(もう一本の読み・意味は)こちらはどうゆう……、その年の干支を付けてやりますんでな。そしてむこうのほう(稲穂の付いたもの)を、オンカシラが持って舞い込むんですわな。でこちら(鯛の付いたもの)をメンカシラが。

また神饌用のオセシキを用意する。今は重箱三個へ白米五合ずつを入れるだけである。昭和三十七年の大改正前は、鳥の舞役二人が装束を著けて口に折紙をくわえ、庭先に石で築いた竈に鍋を据えて一ノ禱が一つ火で薪に火を点じ、炊きあがった御飯を二人がオセシキに押しした。※それはその、イイを、その、一つの枱型のものでな、押しおわたやつですわ。イイですわ。その鳥の舞役が、最初火つけて、炊きあげた、それでイイをこしらえて。(イイは)オコワのような、白いオコワのようなもの。それも今は米だけで。

※(神事が一・四・五と三日間だった時の百度参りは)四日でした。今はもうやりません。というのとは、ここと、むこうにバス停があるでしょう、あそこに秋葉さんてのあったんですわ。あその、神宮の遙拝所ですわな、と、ここを往復、たえずやりおったんです。早

朝から。そして鳥の舞役が踊るのに、その間、百度のお参りをやるところに、踊りだすところへ、イワイというんですか、おほめの、本年は大豊年と、ゆうことをつけてその、祝いに来よったんですけどな、今はもう百度の参りやらすにもう、一杯飲んで、そのへんでおって、やってくるわけです。我々の若い当時はみなやりましたけどな。そして何回行ったかわかんもんだから、最初、もううちで藁しべ百本こしらえてきてな、そうゆうふうでやりましたけどな。その鳥の舞が舞うその間に、百度の参りをしてる若い衆が、ほめことばを言って、祝いに来よったわけです。今もそのイワイはやりませけども、その百度の参りはもう……。

○ 一月三日

禱屋は早朝より男女二人ずつ宿元に集合、諸般の準備をする。一日同様、各所へ使者を立てる。当日神祭に要するもの、神酒(甘酒。約四斗)・美濃紙(石州紙で可)・白苧二結・篠竹二本(御幣用)・榊枝四本(御幣用・神饌用)・無垢塩・一夜造り・小判七枚(膳に載せる)・白米三升(神楽米、ユリに入れる)・白米三合(御幣米、重箱に入れてユリに入れる)・白米三合(注連上げ、膳に入れる)・豊年竿一对・腰の物十八本(ヒネリを挟む)・小注連(神饌用、三垂れのもの二本)・オセシキ三個(神饌用)・大蝦二尾(神饌用、白紙の帯を付す)・ワタガセ二尾(同)・味噌少量(神饌用・神役食事用)・塩少量(同)・するめいか十八枚(座配用)・御飯六椀分(獅子舞・小踊用)・榎搗栗六包・瓶子一对・恵比須扇四本・蠟燭二斤ほど・幣串十本・鮎貝・

肴(ゆで菜・大根・なまこ)。このうち、オセシキは二枚の角膳に、一膳には二重ね、一膳には一個を載せる。そして蝦は土器に入れてオセシキの上に載せ、これに三垂れの注連を掛けて榊の小枝を添える。これは膳の右上に置く。ワタガセは土器に入れて左上、味噌・塩は汁椀に入れて左下、木と竹の箸は右下に添える。

昼食後、禱屋は神社に行き、諸準備をする。座配用の敷藁二十把(二把をやり違いにしたもの)を用意、鳥場へ若衆頭用の薦を敷く、追込銭受け入れ用の賽銭箱を宮中所定の位置に置く、豊年竿は小屋場の西側にダイダイホウネンのもの、東側に十二支の付いたものを立てる、など。※追込銭とゆうのは、このかたが、経費に使う。今日の、ぜんぶ村中、氏子が、あそこへ、お金を、まあ、門付けのようなあるんですな、お獅子さんの。それをもう、あそこへぜんぶ、あの獅子頭の前に、賽銭箱と並べて、追込銭とゆう箱を置くわけです。そうゆうのと、さっき集めた、その米ですわな、その一升ずつ集めた、米と、その追込銭とで、禱屋の経費をぜんぶ賄うわけです。

12・34 獅子殿脇の太鼓がたたかれる。すでに諸役は集まっていて所定の位置にいる。

13・00 太鼓がうたれる。宮司も着座。膳二枚に美濃紙二帖・白苧二結・篠竹二本・榊枝二枝を載せ、また無垢塩・一夜造り・小判七枚・白米三升・白米三合(二種)が差し出される。九人役、小判を神殿へ備える。

13・42 14・15 座配。第一献切菜(清酒、もとは甘酒)・第二献

するめいか(もとは鱈)。第二献が終わると鳥の舞役は東から西へ順次、「これより御膳の仕度を致します」と挨拶、小屋に入って縄襷を右肩から片襷に掛け、今度は西より東へ、「只今御膳を差上げます」と挨拶後、宮司に導かれて神饌を神殿に運ぶ。口に折紙をくわえて一ノ禱がオセシキ二重ねのほう、二ノ禱が一個のほうを奉持、宮司が奉奠・拝礼・撤饌し、すぐに小屋場へ持ち帰る。この時の献饌祝詞は次のごとくである。

掛卷母畏伎宇氣比神社乃大前尔宮司氏名恐美恐美母白左久 新志
伎年乃睦月三日今日波志母年每乃例乃随々尔神事乃御賀乃寿詞仕
奉留止禱屋連中与里豊御酒御折敷乎献奉里拜美奉留状乎平良介久
安良介久聞食志此乃年乎良伎年乃美志年止守給比幸給比氏天皇乃
大御代乎手長乃御代乃嚴志御代止堅磐尔常磐尔齋奉里幸奉里給比
御氏子崇敬者乎始米氏天乃下四方乃国民尔至迄大神乃高伎尊伎神
威乎弥益々尔仰昔奉良志米給比各母各母神道尔違布事無久負持津
職業尔勤美励美互尔睦毘和美津々世乃人乃幸福乎進米志米給閉止
恐美恐美母白須

宮司・九人役上席者の挨拶後、第三献空盃(シアゲの口を白紙で包んだもの)は給仕人が各座の下座に立って一礼する。太鼓が鳴る。以前はこのあとにザナオシといって宮中へ肴(俵物)・捨て盃(同一の日に同じ肴で二回出すの一回をいう)を出したが、丸注連納め後に肴(切菜)で一献で出す酒を捨て盃と改められている。また、オセシキが、一ノ禱の持ったのは宮司、二ノ禱のは九人役上席者宅へ贈られ

る。

14…28 笛・太鼓が鳴って丸注連納めが始まる。宮司の指図によって素袍役九人が行なう。一同拝礼ののち二組に分かれ、塚竹を握って左・右・左の順、つまり南・北・南へ倒し、ヨイヨイ……の掛け声で縄を巻いたままの竹を抜き、根元を先(南)にして宮中裏へ運ぶのである。

14…44～14…57 鳥の舞。この時の奉納祝詞は次のごとくである。

掛巻母畏伎宇氣比神社乃大前尔官司氏名恐美恐美母白左久 新志
伎年乃新良志伎月乃新志伎日乃今日波志母年每乃例志乃随々尔神
事乃御賀乃寿詞仕奉留止豊御酒御折敷乎献奉利拜美奉留状乎平良
介久安良介久聞食志又大前尔奏伝奉留鳥乃舞乃歌舞乃技乎母米具
志宇牟賀志止見曾奈波志氏此乃年乎良伎年乃美志年登守給比幸給
比氏天皇乃大御代乎手長乃御代乃嚴志御代止堅磐尔常磐尔斎奉利
幸奉給比氏御氏子崇敬者乎始米氏天下四方乃国民尔至留迄大神乃
高伎尊伎御神威乎差昇留初日乃光止共尔弥益々尔仰芸奉良志米給
比各母各母神道尔違布事无久負持津職業尔勤美励美互尔睦毘和美
津々世乃人乃幸福乎進米志米給比子孫乃八十統五十櫃八桑枝乃如
久立栄衣志米給閉止 恐美恐美母御賀寿詞称奉良久止白須
今年は若い衆は三度寄せて来るだけで、去年のような鳥の舞役を抱き
あげて方向を変えて走り去るといふようなことがない。

15…06 タナオロシ。獅子舞役・小踊役が装束を著け終わると、木と竹の箸、味噌・塩を添えた一椀飯を出す。

15…28～15…50 一番起こし。

15…59～16…23 二番起こし。

16…40～17…05 三番起こし。

17…16 寺方二人が揃ってやって来る。

17…17 紋付羽織袴で村役人二人来る。村役人は今は自治会の正副

会長と会計の三役。

17…24 パッパの火が袴着によって運ばれたあと、一ノ禱・二ノ禱

と九人役末席者二人が寺方村役人に挨拶に行く。三度くり返される。

17…36～17…38 四番起こし。※四番済んでから若い衆が出て来ますんでなあ。豊年竿かついで。

ヨイヨイした時に、小踊が恵比須扇をピッと投げる。それは拾ってよいものだが誰も行かない。それを拾ったものは神棚に飾って置く。オンカシラのを記念にいただく。恵比須扇は、別に、またすぐ渡される。

17…40～18…02 五番起こし。若い衆が豊年竿をかついでワッショイワッショイとやって来る。獅子がアマダレの所へ来たところで、宮司は鳥居の前に無垢塩を持って行き、厄歳の人々のお祓いをする。獅子は宮中から出て来て鳥場に向かってからのあと、鳥居の所に行き、そこでヨイヨイ……の音が七・五・三で掛かり、そしてアマダレへ行き、そのまま宮中に入り、また出て来る。そして廻わらないまま、ずうっとハゼ場のまん中へんまで来て鳥の舞役に向かって舞う。この前あたりから、鳥場からのハゼモースの音が掛かり始める。獅子はさらに鳥場の所、鳥居の所へと行って舞い、また戻って来て宮中へ

向かう。◎こんだオンカシラが（宮中にむかって左手のほうに交替する）、立神のことで寝どこが替わるってねえ。よ、ばい、に行くっ、ちゅな、どうゆう意味かわかりませんがねえ。あ、ここで替わりますんです。で次、六番でまた戻るんです。（鳥の舞役の前での）鳥の舞役に、あの、挨拶廻りです。でその参道で、参拝は、お客さんに対して。ここはもう、秋葉さんに……。そっであの、提燈つけてるねえ、今もう村役場、ありませんけど、その代表者にも、挨拶に行くわけです。（そしてもう一度鳥居のとき）そそ、あそこ、ヤマからもってきます。（舞いかたは）いっしょです。あの青いのが、メン、黄色いのがオス。

終わったところで、九人役二人と鳥の舞役二人と揃って寺方などの所へ挨拶に行く。素襖着が宮中を通りマシタカの伺いに行く。続いて鳥場にも伺いに行く。鳥場の若い衆からは「——殿ニモース」と指名してのオミキの催促が始まる。

18…20…18…40 六番起こし。

18…55…19…16 七番起こし。鳥場とハゼの若い衆との応酬がさかんになる。

19…30…19…52 八番起こし。

19…55 素襖着が宮中、次に鳥場へと「留盃は通りましたか」の伺いに行く。

20…23 九番起こし始まる。◎楽師と獅子舞と、一日も三日も、うちで、十時に禊齋風呂ゆうののいって（それから立石の所へ行く）、

禊齋風呂いりまやねえ。いりたてして、潮かけちゅうのを……。その奉告を、お詣りに来て。立石神社、あのう、石段のある所、あそこの襖ぎする所、ありましたでしょ。あそこで（手を洗うくらいにして）、もう昔は、おいおいだとかね、すっぱり、潮につかって、浄めた、ゆうんですけどね。

九番起こしの時に、また境内入口の櫓の所からまた鳥居の所に行つてヨイヨイ……。太鼓も。鳥居の前での舞いが終わると、そのままマダレに行く。そこで九人役から獅子は扇子をつないだものを口にくわえさせてもらう。そして庭の中央に出て来て舞う。一礼したあとまたすぐ宮中に行く。そしてさっきの扇を、九人役に返す。そうすると素襖着はまた伺いに行く。その応酬。獅子はこの間、鳥居のちょっと南西の所、参道下の所（拝殿近い所）に控えている。三度目の伺い、ずうっと坐わり続けているけれども、通りマセン。さかんに応酬があつてまた返つて来る。小踊はすでにさっきからオッコミセンの前に坐わっている。

21…15 七度半なななはんの伺いで通りマシタが出る。素襖着は参道の所でおじぎをして戻る。寺方以下、十二銅の用意をする。裏方のほうは小屋場関係の片付けに入る。

21…18 十二銅が獅子の所に運ばれる。獅子はそれを宮中に運ぶ。十二銅がくわえられ終わって鳥竿が参道の境まで出てくる。獅子は境内入口に近い櫓の所に位置を占める。その獅子に九人役が腰の物をくわえさせる。そして揃って宮中に向かう。素襖着二人が小屋場の豊年

竿を獅子のうしろ遣いに渡す。酒場で火が燃やしだされ始める。獅子が豊年竿を持って、片足跳びを交互にしながら宮中に持って行く時、オドラッシャレの声が掛かる。酒場の火がさかんに燃えあがる。獅子が樫の木の下に戻ると、鳥場から「パッパの火をひかっしゃれ」という声が掛かり、袴着は袴をとってそれをさげる。その間に獅子は頭をとり、前遣いも顔を出す。パッパの火がさげられ終わると、鳥場から「二十九十八人揃いましたか」の声がかかり、接待役の一同は小屋場・酒場の前に揃う。それを見とどけて、フリダシ二人は鳥竿を持ってハゼ場に出、笹踊りをする。オドラッシャレヤの声が掛かる。しばらくしてイケイケツの声が掛かり、鳥の若い衆が走って火を消しに行く。この間も笹踊りは続き、途中で位置を交替する時にヨイヨイ……の声も掛り、オドラッシャレの声も掛かる。ハゼの若い衆との火をめぐる攻防はさかんにくり返される。ざわめき声も入り乱れる。

22・02 笹踊りが終わって鳥場にひきあげる。その鳥竿が獅子のうしろ遣いに渡される。火はまだ燃え続け、消火はまだ続く。獅子が鳥竿を宮中に持って行くと九人役四人はアマダレで受取り、いったん宮中に引き込んで竿のオヒネリを取り集める。獅子はまた樫の下に戻っている。鳥の若い衆がカケモノザオダゾエーと連呼、九人役二人がその竿を庭で廻わして笹踊り。くり返したあと鳥場に返す。

22・12 鳥の舞役はさっきから追込銭の裏で待機、ここで九人役に挨拶をし、宮司が獅子殿から出したもの（祭文か）を受け取り、アマダレで獅子を招き返す。宮司が獅子の所へ迎えに来て挨拶、すると獅

子は宮中に舞いながら戻る。楽に合わせてまずオンカシラが先にアマダレに行き、そこから鳥居脇に来てさらに宮中の左隅のほうで舞い続ける。メンカシラも同じ。オンカシラはさらに鳥場に行って荒っぽく舞い、さっと宮中に入って頭を脱ぎはずす。鳥場の若い衆はまた火を消してそのまま立ち去る。しかし本来はこの時はもう火を消しに行かないでよいのだという。◎こんだこの薬師堂のほうで若い衆が……。

22・16 一通り終わる。村人はハゼモース、火ノ用心ヲヨメサレーなどと言いながら帰って行く。禱屋の人々はカーシコマリマシターと答えつつ、境内の掃除をする。宮中では直会。

22・58 太鼓を打ちながら獅子納め。ヨイヨイ……の掛け声をくり返すうち、獅子殿の閉扉。

23・05 宮司を先頭に、宮中の一同は薬師堂（秋葉さん）に向かう。この時、メトウザイメサレツ（ホツという掛け声）……ミナーサマーヨイ……、と歌いつつ行く。

○ 一月四日

早朝より宿元で諸事処理し、終わって祝盃をあげて撒銭をする。

※鳥の舞役がポケットマネーで。まあ、みな御苦労さんでしたと。

おわりに

「立神」という地名に魅かれて志摩を訪れるようになり、多くのことを教わった。正月行事という観点からすれば、まだまだ採訪を重ねたい所はあるが、「立神」論のための確信はこれで一つを得た。

写真記録



写真 2 大野浜にたてられたネギ (→109頁)

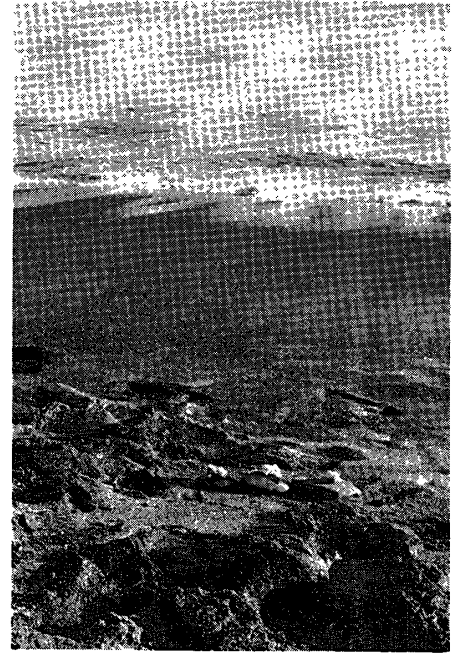


写真 1 リュウグウサンマツリの
神供 (→108頁)

《片田のネギアブリ》



写真 4 オコモリでうたうお婆さんたち (→111頁)



写真 3 燃えあがるネギ (→111頁)

《船越のアタラシキ・トツリアイ》

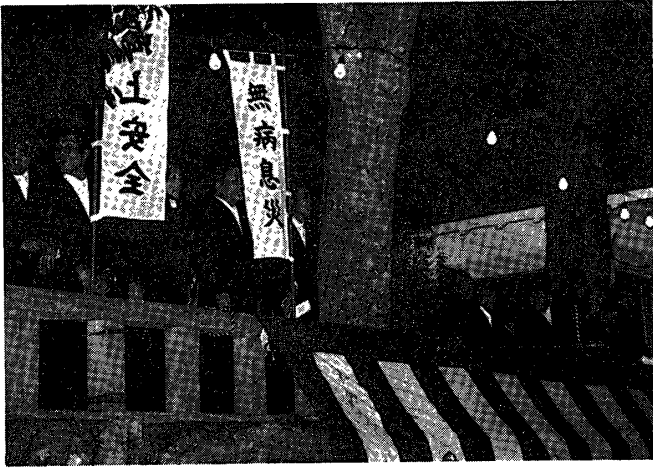


写真 6 アタラシキを唱える人々 (→114頁)

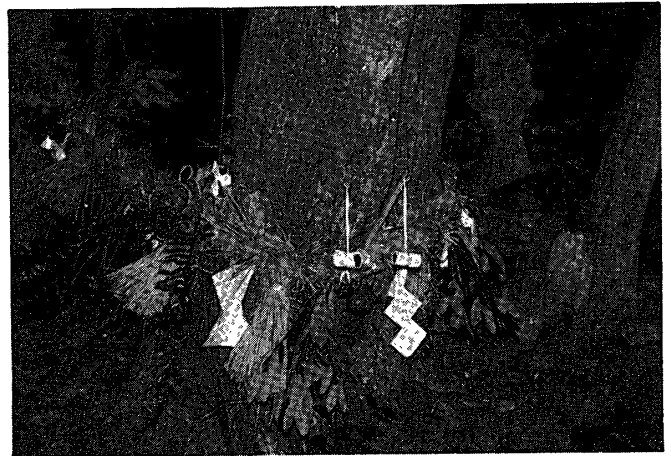


写真 5 椎の木に掛けられた注連 (→114頁)



写真 8 ワカイシュ (左側) のトツリアイ (→115頁)



写真 7 ハナジュバンを着たワカイシュ (→114頁)

《国府の獅子頭神事》

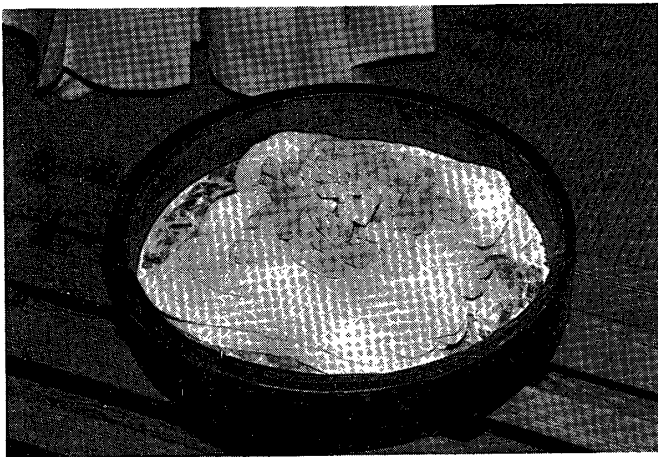


写真 10 オンタモチ (→116頁)



写真 9 オンタモチをくわえる獅子 (→116頁)